

広報ちゅうぎん

12月1日発行
編集者：池澤



被災地の医療ボランティアに参加して

看護師 田名 諭季

東日本大震災の際、病院皆様の支援を頂き1週間被災地へ行き、ボランティアに参加しました。自分のような看護師としての経験も浅い人間が参加して何か役に立てるのかという心配が一番強かったです。

実際に現地についてはからは今後の生活の目処が全く立たないことを不安に思いながらも避難所の中でそれぞれ仕事を分担し、お互い助け合いながら生活しており、震災直後のように医療者が必要とされる段階はほとんど過ぎていたように思います。現在ではニュースで取り上げられる事も少しずつ少なくなり、復興に向け自分たちの支援など必要ない様に思ってしまうこともあります。これから冬を迎え、更にもとの生活に戻るには何年もかかると思います。

自分にできる事といえば普段の買い物で購入するものを代えて被災地のものを購入することくらいしかないかもしれませんが、小さなことを続ける事で積み重なっていく事を忘れず過ぎして行きたいです。

この文章を読んでくださった方がその時に自分にできる支援はあるかと考えるきっかけとなれば幸いです。拙い文章ではありますが読んでいただきありがとうございます。

Never Give Up.
がんばろう
日本

第8回ちゅうぎん祭りを終えて

家族会実行委員会 武富新太郎

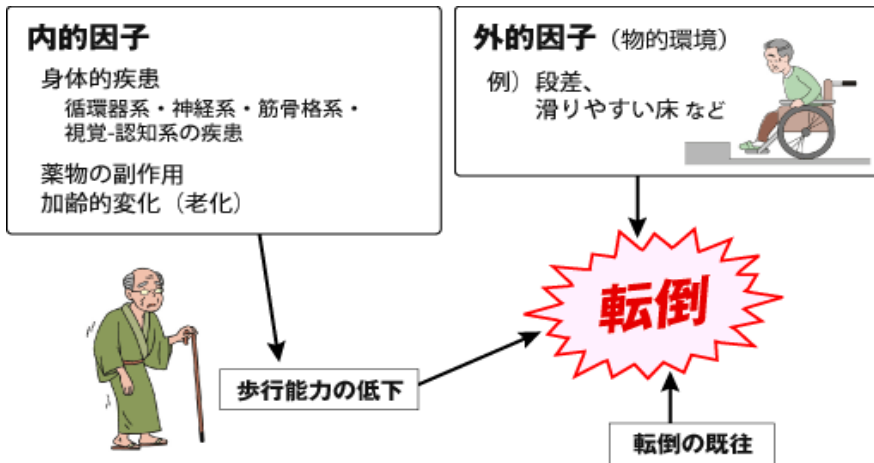
去る十一月六日に第8回ちゅうぎん祭りが開催されました。昨年に続き院外の方々による三線演奏、ダンス、体操、当院スタッフによるエイサーなどたくさんの方の余興で盛り上げて頂きました。また、小物作り体験や当院職員紹介、介助方法説明、福祉機器展示などもあり、昨年延续了大盛況となりました。院内外を問わず、協力してくださった方々に感謝するとともに、来年もより一層いい行事とできるよう努力していく次第です。ありがとうございました。



転倒予防について

医療安全対策委員会

年齢や疾患によっては骨が弱くなっていることもあり、転倒すると骨折に至るケースもあります。転倒によって太ももの骨折（大腿骨頸部骨折）を引き起こしやすく、手術を要することもあります。日常生活に大きくダメージを受けてこともあります。



転倒の要因

転倒の要因には、内的要因（バランス能力、関節・筋力）外的要因（段差など）があり、それらが複合的に作用し起きてしまいます。転倒しやすい動作としては歩行中の方向転換や段差での足の引っかけ、ベッドや椅子などへの乗り移り、ドアの開閉動作などがあります。これらの動作の際は注意が必要で、介助方法にも注意点がありません。脳卒中後遺症による障害があれば、麻痺側にバランスを崩す場合が多い為、介助者は麻痺側に立つようにします。病状によって出来る動作と苦しい動作、転びやすい方向などがあり、それらは病棟スタッフが把握しています。介助者が予めポイントをおさえておくことで転倒を防げる場合もあります。

病院での取り組み

ちゅうざん病院では、入院時に御家族から入院前の生活状況や自宅環境などの情報収集を行っています。その情報や入院患者様の現状の生活能力などを考慮して、入院中に自宅で行う動作の修得を目指しています。入院中に転びそうになるなど、リスクの高い動作に関しては病棟内で対策を立てて、病棟内スタッフ間で情報を共有することで転倒防止に努めています。例えば、転倒しそうなになった動作や転倒してしまった時には何故、転倒してしまったのか、その時の状況や環境などの情報も含めて病棟スタッフで原因を探し、対策を話合います。その話合いのもとに介助方法の統一や家具・福祉用具を使用し環境調整を行い、バランス能力や筋力の向上などを目的に身体的な能力の改善にも取り組んでいます。

外出・外泊について

病院では、外出・外泊前には注意点や介助方法、動作指導の伝達を御家族に行っています。入院生活における外出・外泊では苦しい動作や自宅環境に沿ってトレーニングを行っています。自宅や外出先でバランスを崩すような動作や環境があれば、病棟スタッフまで情報を教えて頂けたらありがたいです。入院生活の中で改善していけるように取り組み、退院後の生活が安全に暮らして行けるように努めていきたいと考えています。